

## 2．寄贈者挨拶

速水 融 （麗澤大学名誉教授）

ただいま、ご紹介にあずかりました速水でございます。梅田学長から身に余るお言葉をちょうだいし、大変恐縮しております。

私は、自分では、これといったことをしてこなかったと、いまだに思っております。ただ、幾らか根気はあったかもしれません。一つのことをずっと続けてきたということは言えるかもしれませんが、特に何かの才があって続けてやってきたわけではございません。にもかかわらず、このようにたくさんの方々が、本日の記念すべきシンポジウムにお集まりくださったことを、大変光栄に存じます。

ここに至りました経緯は、もう梅田先生からご説明がありましたし、それから、また後に研究発表が控えておりまして、私の申すべきことというのは、両方から挟まれてしまってほとんど何もないと、「これをもちまして」と言って段を降りてもいいのですけれども、少しだけ時間をいただいております。

私が歴史人口学、historical demography と出会ったのは 1964 年、今から 42 年前のことです。留学先のベルギーにアントワープという古い街がありまして、その大学で親しくなりましたベルギーのある先生が、「最近、ヨーロッパで大変人気を博している」というか、「学会をにぎわしている本があるのだ」ということで、わたしに 2 冊の本を示してくださいました。そのうち 1 冊は展示されておりますけれども、フランス人口学研究所のルイ・アンリという人の書いた、教会の記録を使った歴史人口学研究であります。ルイ・アンリという人は、世界中から、「歴史人口学の生みの親」と言われております。展示場には 80 歳の記念メダルも飾っておきましたから、ぜひ、ご覧になってください。

教会の記録というのは、キリスト教の場合、生まれると洗礼を受けます。洗礼を受けないと、キリスト教徒にはなりません。それから結婚する場合には、牧師が立ち会います。死ねば、やはり死亡に立ち会って、そして教会の墓地に埋葬します。そのような出生、死亡、それから結婚。出生と死亡は、人間ならばだれしもが経験します。それから結婚も、多くの人が経験します。これを記録した資料で、「教区簿冊」と呼んでおります。

この三つの事柄について、「何年何月何日、だれとだれが結婚しました。だれが生まれました。これは、だれとだれの子供である」というようなことが書いてある、一見単調な史料なのですが、この名前をずっと追って、「こ



れこれの人が、何年の何月何日に生まれました」それが、「二十数年たって、だれかと結婚した」そして、「それがどうやって子供を産んでいったか」「その産んだ子供は育ったか」、あるいは「すぐ死んでしまった」か、そしてまた、「その子が結婚した」とかです。それから、本人たちの結婚がいつ終わったか。例えば「夫が死んで終了した」とか、それから最終的には妻も死んで、結局「その夫婦は、人生を終わった」ということです。

このように人の一生をずっと追っていく、特に結婚した夫婦を単位として追っていくという方法が開発されたのです。これを、「家族復元 Family Reconstitution」と呼んでおります。それまで、教区簿冊を利用する人はいましたが、これを組織的には使ってこなかったのです。それを初めて組織的に使い、今言ったような方法で人口学、特に結婚と出生に関するデータとして生命を吹き込んだというのが、ルイ・アンリなのです。

ついこの間、実は、「Family Reconstitution Sheet」というシートを作成するのが第一の作業なのですが、そのルイ・アンリのもとでそれを書き込んだ人に会いました。その人が言うには、ルイ・アンリという人は大変厳格な人で、例えばそのシートを作るのに、その当時、出回ったばかりのボールペンを使おうとしたら、「だめだ」と。なぜかという、ボールペンは——今、われわれはボールペンを平気で使いますけれども——、出たばかりのときは、字が途中で消えてしまう恐れがあったそうです。だから「ペンで書け」と言われたというのです。それぐらい厳格に史料を再現、写し取って reconstitution をやるという、これは、あまり知られていなかったことなのですが、わたしのフランスの友人が言っておりました。

それから、この方法は英仏海峡を渡ってイギリスに移ります。イギリスにケンブリッジ・グループと称する研究組織ができます。ここでは、教会の記録ばかりではなくて、戸籍型の記録も同時に集めて、「History of Population and Social Structure」という一つの研究題目を掲げて、相当高額な研究費を得て、ずっと活動を続けてきました。

私が、そこで初めて報告をしたのが 1969 年なのですが、69 年に報告して以来、このグループの特徴は、各国、いろいろな国の人を呼んで、そして自由に研究をさせる、そして時々研究会をやるのですが、そのような機会に恵まれまして、いろいろな国の人々と知り合いになることができました。また、日本からも大勢の方がそちらに研究をしに行かれて、成果を上げられています。中には、教区簿冊を使って自分で本を書かれた人も、この中にいらっしやいます。

とにかく、そのケンブリッジ・グループが、教区簿冊に関して言えば、このイングランドとウェールズにおきまして約 400 の教区に関する簿冊を集めて、それを使って 1 冊の本が出ました。そうすると、もう、一つや二つの教区簿冊を使った研究というのは、あんまりできなくなってしまうのです。さらに、その 400 の中から、非常に優れた記録をもつ 26

の教区を選んで、より深く突っ込んだ研究を出しています。

ですから、ことイングランドに関する限り、それを抜く教区簿冊を使った研究というのは、ちょっと出そうにないなと思います。あるいは全く違った手法で出るかもしれませんが、とにかくそのような状況なのです。

私は、たまたま留学中、そのような歴史人口学が出てくる、その最中に飛び込んでしまいました。歴史人口学そのものは、実は、日本では全く知られていなかったのです。ヨーロッパでそのような研究が起こってきたのが 50 年代の末、それから 60 年代には、すでに、そのようにイギリスやフランスにそれが広がっていたわけなのですけれども、なぜか日本のヨーロッパ史をやる人たちは、人口に関しては、ほとんど報告されていないのです。中には、国際歴史学会に出たけれども、「人口の部分は省略する」などと書いてある人もいて、要するに、人口に関する関心というのが非常に薄かったということになります。

ところで、私は 1964 年に帰ってきました、ちょうど東京オリンピックにわいていたのですけれども、まず、すでに写してあった尾張のある村の宗門改帳の分析から始めました。

日本の史料というのは、宗門改帳というものです。徳川幕府がキリスト教厳禁の政策の結果、1 人 1 人、「間違いなくキリスト教徒ではない。仏教徒だ」ということを、寺の印をもらって領主に差し出しました。これが宗門改帳で、大体、鎖国令の出たところと同じころです。1638、9 年に出されています。それが 1671 年には、全国で作られるようになります。

その最初の尾張のある村の宗門改帳に Family Reconstitution を適用して、論文を書きました。今から振り返ってみると、実につたない論文で、書き直したくなるのですけれども、とにかくそれをやりました。

それから次に、私は東京の当時の国立史料館を訪ねまして、信州諏訪地方にたくさん宗門改帳があるというので、それを写しました。折から大学紛争で騒々しかったのですけれども、わたしの部屋は幸い裏側にあったので、静かにその史料整理を進めました。その過程で、整理に便利な方法をいろいろ開発いたしました。史料は原則として、毎年作成されます。シートに人の名前、それから、こちらに年代を取ります。そうすると、史料を写すところのようにこうなります。こちらに年齢を入れていきます。そうすると、ある年のある人の名前の下に年齢がきます。それから翌年、1 年たてば 1 歳年を取ります。

そのようにしてできていくわけですが、時々、浦島太郎もいます。史料の間違いでボーンと飛んでしまうのです。ですが、とにかくそうやって作ったシートを縦方向に見ると、ある 1 人の人間が生まれてから死ぬまで、あるいは、史料に登場して史料から消え去るまでを、追いかけることができます。そのときの家族の状態とか、その他の状態とともに、これを見ることができます。

というわけで、歴史人口学にとって、この「宗門改帳」は非常にありがたい史料なので

す。同時に、これは家族とか世帯を研究する方にとっても、非常に貴重な史料だということを知りました。

このことには、二つの重要な含意があります。一つは、歴史人口学の成立したキリスト教社会の教区簿冊は、確かに、出生に関して洗礼という形で記録をします。けれども、例えば出生率を求めようとするとき、問題が起こるわけです。つまり、教区の総人口とか年齢別人口とか、率計算の分母になる数字、これを population at risk と言いますが、アット・リスク・ポピュレーションが「教区簿冊」には書かれていないわけです。たまたま求められることもあります、原則はありません。ところが日本の宗門改帳は戸籍型ですから、そのとき村に総人口何人、あるいは年齢別人口がどう、ということが分かります。そのような点で、これは非常に parish register に比べて、歴史人口学・家族史の史料としての価値が高い。

それから 2 番めは、先ほど申しましたように、人口と同時に、家族・世帯のあり方、家の継承、継ぎ方とか、そのようなことも分かります。最近では、壇家の制度について本を出された方もいらっしゃいます。

もちろん、どんな史料にも欠陥のないものはありません。日本の宗門改帳は毎年 1 回の調査、その時点の結果を記録しますので、調査と調査の間に生まれて死んだ者、これは原則として書かれていません。ですから、いわゆる乳児死亡率というのは出せないわけです。この点は、parish register のほうがいいかもしれません。また、史料自身、年齢の記載がないとか、あるいは 6 年に 1 回しか調査しないと、ある年齢に達しないと調査対象にしないと、いろいろな弱点を持った史料もたくさんあります。徳川時代の日本は、200 以上の大名がいました。極端なことを言うと、その大名がそれぞれ調査の方法、書式を持っているわけで、全国统一された書式があるわけではないです。そのような弱点があります。

しかし、とにかく、これはヒューマン・ドキュメントであります。そのような点で、私は、一つの文化遺産と言ってもいいのではないかなと思っています。これは、わたしが集めてきましたミクロ人口史料の持つ特徴であります。

もう時間がありませんから、マクロ史料のほうは、ごく簡単にだけ申します。宗門改帳は明治 4 年、1871 年が最後で、それ以降のミクロ資料はあるにはありますが、これは使えません。存在するのはマクロ資料です。つまり、例えば府県別とか郡別とか、あるいは市町村別の人口を集めてしまい、個々の人の名前は出てこないのです。

しかし、明治 13 年以降、戸籍帳を基礎にした人口統計が明治 30 年まで、31 年以降は 5 年ごとの日本帝国人口静態統計、32 年以降は日本帝国人口動態統計が編さんされます。また、全国農産表とか日本帝国死因統計等が中央官庁で編さんされます。また、明治 17 年以

降、県によって違いはありますが、府県ごとに府県統計書というのが編さんされます。また、大きな都市では市統計書というものも編さんされます。年代を明治、大正期に限りましたが、マイクロフィルムから焼き付け製本した府県統計書も、同時に寄贈をいたしました。

それらは、もちろん、全部わたしの私財を投じたわけではなくて、科学研究費とか民間財団、あるいは大学の研究費によったものであります。かなりの量に達しましたそのような史料を、研究文献とかレファレンス史料と一まとめにして、どこかの機関に寄贈し、さらなる研究を進めるべき研究拠点を構築したいというのが、わたしの考えていた夢であります。幸い麗澤大学がご理解を示され、今日に至り、かつ今日の会を持つことができましたのは、この上ない喜びであります。

歴史人口学には、政治権力者や偉い人の名前は出てきません。研究の目線も庶民生活にあります。そういった意味では、ここで描く「歴史」は「下から」の歴史であり、いままで主流であった、「上から」の歴史ではありません。歴史人口学には、そういった革新性があることを強調したいと思います。

毎年、このところ、ミクロ、あるいはマクロの史料を利用した歴史人口学や家族史研究の著書が刊行されていることは、この展示されていた書籍からお分かりになると思いますが、もちろん、これで十分というわけでは決してありません。われわれはまだ、スタートラインについたばかりと言ってもいいでしょう。梅田先生もおっしゃいましたように、これらを維持・拡充し、新しい方法を開発して利用し、研究を進めていくことを切望いたしまして、私のあいさつにいたしたいと思います。どうもありがとうございました。